都留文科大学研究紀要　第94集（2021年10月）
The Tsuru University Review, No.94（October, 2021）

〔研究ノート〕

「仮名書梵網経菩薩戒」における共通語と異なる濁点を有する語について

A Note on the Words in "Kanagaki Bommoukyo Bosatsukai" (仮名書梵網経菩薩戒) That Have Different Voiced Sound Marks from the Common Japanese Language

加藤浩司
KATO Koji

はじめに

本稿では、二〇一九年度大学院国文学専攻科目「日本語学演習Ⅰ」で研究の対象とした「仮名書梵網経菩薩戒」における共通語と異なる濁点を持つ語について、限定的にではあるが調査し、そのデータを先行研究で指摘されている北部東北方言の語中尾カ・タ行音の有声化現象および過去の日本語文献資料における同様の現象と比較したいと思う。そしてそれらの現象との共通点、または相違点を検討し、本資料における共通語と異なる濁点を持つ語が、どのような日本語の現象を反映したものであるか、考察したいと思う。

一　調査対象について

本稿で調査対象とする「仮名書梵網経菩薩戒」（ただし仮称である）という資料は、加藤浩司蔵「両点本法華経（大型本八帖）」の第二帖裏面にほぼ全帖に渡って書写されたものである。同経は江戸時代後期刊と推定されるが、正確な刊年は不明であり、かつ本資料の書写年代も、江戸時代後期から明治時代初期にかけてであろうと推定さ

れるものの、やはり正確な書写年は不明である。墨付き部分は全部で百四十二折、本文は一折ごとに五～七行、一行三十～四十字程度の字詰めで漢数字以外はほぼ全て平仮名、稀に「上、正、京」などの漢字を交えて書かれている。

本資料の原典であると推定される「梵網経菩薩戒」は、正確には「梵網経廬舎那仏説菩薩心地戒品第十」の下巻であり、大乗仏教において仏教修行者である「菩薩」の守るべき十重禁戒、四十八経戒という戒律を示したものである。演習では、本資料の当該部分と江戸時代の刊本であると推定される「梵網経菩薩戒」という無刊記本の漢文部分とがごく一部を除いてほぼ対応したため、これが本資料の原典か、原典でないとしても原典に極めて近い、と推定することができた。

演習では、本資料の本文と、原典（に近い）と推定された「梵網経菩薩戒」の原漢文とを左右対応する形で翻刻を試み、最終的に、墨付き部分の一折目から三十二折目まで翻刻することができた。本稿ではこのうち一折目から約半分の十五折目までを調査対象とし、共通語とは異なる濁点を持つ語を抜き出した。それが別掲資料の（表一）である（注一）。

二　先行研究の紹介

渡辺修平氏は「青森県黒石市方言の音声事象について―共時論の視点から―」（『弘学大語文』10、1984.3）において、同方言の音声事象について、

1　有声化現象　語中尾の /k,t,c/ が /g,d,dz/ になる。

2　鼻音化現象　語中尾の、共通語 /z,d,b/ に対応する子音の直前に入り渡り鼻音があり、/~z,~d,~b/ となる。

3　1にならない条件として、①語頭、②/N/ の後、③/Q/ の後、④/E（長母音）/ の後、⑤無声母音の後

4　2にならない条件として、①語頭、②/N/ の後

5　/~z,~b/ ＋無声母音の場合、/z,b/ →/c,p/ となる場合あり。

6　共通語の /E（長母音）/ →鼻音要素となる場合あり。5、6は鼻音音素 /M/ を立てると合理的に説明できる。

7　1の前に2の観察される例（ta~dami、畳など）がある。

といった点（ただし加藤による要約）を指摘し、そのうえで　問題点の解釈を試みている。

また、迫野虔徳氏は、「第四章　方言特徴の成立―「中濁」考―」（『文献方言史研究』清文堂1998所収）において、

一　『荘内方音考』にはカタ行音に「中濁音」という特殊な音があると書かれている。ただし現代の東北方言では促音・撥音・無声化母音の後では起こらない。現代の方言の「中濁」現象が生じたのはいつごろか。井上史雄氏は「中世」に起きた現象とする。

二　江戸後期に青森県を出港してロシアに漂流した人の言語を記録したタタリーノフ編『レキシコン』では

a　語中尾のカ・タ行音は原則として有声化する。

b　ただし促音の後では有声化しない。

c　同じく撥音の後でも有声化しない。

d　同じく無声化母音の後も有声化しない。

e　dと差別化され有声化する事例の確認。

三　元亀二1571年本『運歩色葉集』には「中濁」と思われる例がある。①ライマンの法則に抵触する例、②森田武氏が日葡辞書を調べて発見した濁音音節の並列の制約に抵触する例、などは「中濁」であろう。これを検するため無声子音間にi,uが挟まれた語例を調べてみるとハツツゲ、アクダを除いて狭母音i,uの場合に不審な濁点が集中する。例外の理由も説明できる所から、やはり「中濁」を表したものと推定できる。「等円」の「関東口」という書き付けや「ケツマグル」という語から『元亀本』の著者師岡は恐らく東北地方の出身だろうと思われる。

四　「中濁」現象の成立を、これがカタ行に見られサハ行に見られないことから考察する。ロドリゲスの『日本大文典』1604にはガダ行には入り渡り鼻音があるが、バ行にはかすかにそれがあるというに留まり、ザ行については指摘がない。入り渡り鼻音は破裂や破擦の際止めた息の一部が鼻に抜けて生ずるもので、摩擦音では考えられないことから、有声化が始まったころにはザ行音が摩擦音化していて入り渡り鼻音を備えていなかったため有声化が控えられたことが考えられる。バ行音についてもその調音位置から鼻への息の流出が難しく入り渡り鼻音が早く消えたのではないか。以上から有声化はその後で相当新しく、「中世」という井上氏の推定は認めてよい。

と述べ（ただし加藤の要約）、中世末から近世後期に青森県、ないし東北地方に、「中濁」と呼ばれる語中尾カ・タ行音の有声化現象が既に存在していたことを推定している。

三　「仮名書梵網経菩薩戒（仮称）」における共通語と異なる濁点を有する語の分類と検討

「仮名書梵網経菩薩戒（仮称）」の一～十五折目から得られた共通語と異なる濁点を有する語を、その特徴から次のグループに分類した。語形の直後の数字は出現数である。また同語が濁点を伴なわない形で出現している場合はその語形と出現数をその後の（　）内に示した。なお語頭の＊印は一語の中に二種類以上の音声現象が出現しているため重複して掲げた語を示す。

A　語中尾カ行音有声化の例（計69、例外8）

あぎらがに（明）1、あぐどう（悪道）1、あげん（明）1、あのぐたら（阿耨多羅）1、いがに（何）1、いがん（如何）2、いづぐんぞ（安）1、かげたり（少）1、かッかぐ（各各）1（かくかく1）、きぎ、きぐ、きげ（聴）4（きく1）、くちづがら（口）1、けんなぐ（険悪）1、―ごとぐ（如）3、ことことぐ（悉）2、＊こどこどぐ（悉）1、さいぶぐす（催伏）1、じがい（持戒）3、正ぶぐす（消伏）1、正をぐねん（正憶念）1、すみやがに（速）1、そうよぐす（澡浴）1、だいとぐ（大徳）1（だいとく2）、たがふらず（高振）1、たがら（宝）1、とぎ（時）2、とぐ、とぎ（説）3、とぐどう（得道）1、とごろ（所）1、なが（中）3、ながれ（勿）5、なぐんば（無者）2、ねがわぐわ（願）1、はらだいもぐしや（波羅提木叉）1（―もくしや1）、ほとげ（仏）3、ほりげ（暫）1、みつがら（自）1、むなしぐ（空）1、もをげ（設）1、もぐねんす（黙然）1（もんねん1、もくねん2）、よぎ（利）1、よぐ（能）5、よをやぐ（漸）1、をが（格＋係助）

1、をがす（犯）1

B　語中尾タ行音有声化の例（計69、例外5）

あづまる（集）1、あどを（与）1、いだづらに（徒）1、いだる（至）1、いぢじ（一時）1、いのぢ（命）1、おいで（於）1、かだし（難）2、―がだし（難）2、こど（事）10、―こどく、こどし（如）2（ごとし4）、＊こどこどぐ（悉）1、―ごどし（如）1、こどなる（異）1、しただり（滴）1、じづ（術）1、じゆご、にぢ（十五日）1、すなわぢ（即）1、せづ（切）1、たでまつる（奉）3、―だまう（給）1、たもぢ（保）1、―だる（助動「たり」）1、―で（接助「て」）7、―ど（格助「と」）3、―どう（等）1（とう1）、にぢや（日夜）1、ねづのを（熱悩）1、のぢに（後）1、ふさづ（布薩）1、ほういづ（放逸）1、ほうえづ（放逸）1、ほ江づ（放逸）1、ぼさづ（菩薩）1、ほどけ（仏）1、まだ（亦、複）6、まづ、まぢ（須、待）2、みづ（満）1、もづざいす（没在）1、もどめ、もどむる（求）2

C　語中尾ハ行音有声化の例（計3）

いッば（言者）1、じッぽう（十方）1、ぶッぽう（仏法）1

D　語中尾サ行音有声化の例（計1）

そうじゆす（喪失）1

合計　155（ただし重複語「こどこどぐ」1語＝2例分を含む）

A、Bについては、若干の例外はあるものの、それぞれ数多くの用例があるため、本資料においては、語中尾のカ・タ行音が原則として有声化していたらしいことが窺われる。

Cの語中尾ハ行音有声化の例については、3例しかなく、かついずれも促音直後であり、共通語であれば半濁音（パ行音）の期待される位置である。本資料では半濁音（パ行音）を区別して表わす表記方法である半濁点「゜」などが用いられていないため、Cの「いっば」などの例は、半濁音形「いっぱ」を表わすものとも考えられ、このCの3例のみからは、本資料において、語中尾ハ行音が有声化していたことを表わすとは断言できない。

Dの「そうじゆす」については、該当する原漢文では「喪失」となっており、何らかの誤りである可能性がある。確実な例とは言い難く、本資料において語中尾サ行音が有声化していたとは認めがたい。

四　青森県黒石市方言との共通点・相違点

二で紹介した渡辺論文における青森県黒石市方言との共通点・相違点として、まず共通点としては、渡辺論文の

1　有声化現象　語中尾の /k,t,c/ が /g,d,dz/ になる。

という点が本資料におけるA、Bの多数の用例から、ほぼ認められるであろう。

渡辺論文の2の入り渡り鼻音に関する現象については、本資料の表記の状況からは判断不能である。入り渡り鼻音を表わすための特別な表記の要素が用いられているようには見えないからである。

3の「1にならない条件として、①語頭、②/N/の後、③/Q/の後、④/E（長母音）/の後、⑤無声母音の後」という点に関しては、①～⑤のそれぞれについて個別に検討することができる。まず①の語頭において有声化しないことについてはその通りであると認められる。②の/N/の後についても、A、Bの諸例においてあてはまるものはなく、逆に、撥音の後以外では有声化している引用の格助詞「と」が撥音の後では「とがんと」（2-3、二折の三行目を表わす、以下同）「もくねんと」として（2-4）」などと有声化していない。③の/Q/の後についても、半濁音を表わしたものではないかと推定したCの3例を除けば、A、Bの諸例にそのような例は見当たらないため、その通りであると言える。⑤の無声母音の後についても、無声母音の後で、後続母音がa、e、oの場合は、

ひとたび（5-3）、ひと（5-5・14-3・14-4・15-1）、つとめて（8-4・つとめで9-5）、ちかし（9-1）

というように、有声化していない。後続母音がi、uの場合は、

むなしぐ（6-4）、じづたり（11-2）、くぢづ、がら（14-2）

というように有声化しているが、これはそもそも後続母音がi、uの場合は前接子音の直前に位置する母音自体が無声化していないためである（後述の迫野論文を参照のこと）と考えられ、⑤の反例とはならないため、この⑤についてもその通りであると言える。

ただし、④の/E（長母音）/の後、については必ずしもその通りとは言えない。Aの諸例の中に「もをげ（設）」という例が一例のみではあるが見え、長母音の直後に有声化した例があるのである。

ただし、この④については渡辺論文においても例外が多く存在していたものである。渡辺氏は④については

ビョーキ（病気）、ジョーカマヂ（城下町）、ノーカ（農家）、コーチョー（校長）、コーツー（交通）、チューカ（中華）

を挙げていた（渡辺論文では簡易音声記号表記である部分をここではカタカナ表記に変更して示した）が、例外として

ホーヂョー（包丁）、キーダ（聞いた）、ショーヂュー（焼酎）、ゾーギン（雑巾）、チョーヂン（提灯）、ケード（毛糸）

も挙げている（同前）。④に該当する六語は全て漢語であり、黒石市方言における日常語としてはおそらく近代以降に流布した語群ではないかと推定されるものであるのに対し、例外として挙げられている六語は、和語か、漢語にしても近代以前から日常語として流布していた可能性の高いものである。以下、そのような判断の根拠として、各語の、『日本国語大辞典第二版』での初出例の出典を示す。（ただし「聞いた」については挙げるまでもないと考えて示さない。最後の「毛糸」は明治期初出であるが、和語として有声化されたものか。）

病気…古事談（1212-15頃）五・関寺霊牛事（ただし漢文中、和文中では保元（1220頃）か）中・左府御最後事）

城下町…財政経済資料－八・経済・雑業・興業幷遊芸・文政七年（1824）九月

農家…浮世草子・近代艶隠者（1686）四・二

校長…当世書生気質（1885-86）〈坪内逍遥〉六

交通…数学ニ用ヰル辞ノ英和対訳字書（1889）〈藤沢利喜太郎〉

中華…本朝麗藻（1010か）下・和高礼部再夢唐故白太保之作〈具平親王〉（ただし漢文中、和文中では正法眼蔵（1231-53）弁道話）

以下例外

包丁…経国集（827）一四・彘肩〈仲雄王〉（ただし漢文中、和文中で

は宇津保（970-999頃）蔵開上）
焼酎…御伽草子・酒茶論（室町末）（古典文庫所収）
雑巾…文明本節用集（室町中）
提灯…壒嚢鈔（1445-46）二
毛糸…尋常小学読本（1887）〈文部省〉

よって、これらのうち、④の諸例とされるものは近代以降に共通語等として他地域から黒石市方言に流入してきた漢語であるため有声化していないものである可能性が高く、黒石市方言としてはむしろ例外の六語のように有声化しているのが原則ではないかと判断されるのである。

以上、④についてはそもそも現代（ただし渡辺氏の調査は一九八三年前後と推定される）の青森県黒石市方言においても必ずしも有声化しない条件とは言えないのではないかと考えられ、結局、本資料においては、青森県黒石市方言における語中尾カ・タ行音有声化現象と比較して、共通点こそあれ、明確に相違するとできる点は見当たらないと言える。

五　「中濁」現象との共通点・相違点

前節と同様に、迫野論文における「中濁」現象と、本資料の調査結果とを比較・検討して、その共通点・相違点を検討したい。

迫野論文では第二節でタタリ―ノフ編『レキシコン』における

a　語中尾のカ・タ行音は原則として有声化する。
b　ただし促音の後では有声化しない。
c　同じく撥音の後でも有声化しない。
d　同じく無声化母音の後も有声化しない。

という特徴を指摘していた。aの語中尾カ・タ行音の原則有声化については三、四節で検討したように本資料でも同様であった。

b～dの、aの例外となる条件についても、それぞれ例外となる場合（十五折まで。なおカ・タ行子音に傍線を付けた）を拾ってみると、

b　促音の後
ぼさッかい（2-1・15-6・ぼさかい7-2）、いッば（＝いっぱ？3-4）、もッて（5-1・6-4・8-5）、うしなッつれば（5-3）、かッかぐ（6-1）、よつて（7-1）、こんごう、ぶッとに（7-3）、したがッて（10-1）、じッち（10-4）、せッかい、せんと（13-4）

c　撥音の後
とがんと（2-3）、もくねんとして（2-4）、ぢん京、すべし（3-4）、びんきう（8-2）、めッしなんと（9-2）、いがんと（9-3）、しんくを（10-3）、ほんと（10-4・13-1）、せッかい、せんと（13-4）

d　無声化母音の後、後続母音がa・e・oの場合
ひとたび（5-3）、ひと（5-5・14-3・14-4・15-1）、つとめて（8-4・つとめで9-5）、ちかし（9-1）

というように数多くの用例が見られる。しかも、迫野氏が

(e)無声子音に挟まれた狭母音i・uが無声化するのは、後続母音がa・e・oの場合で、i・uが後に続く時は、無声化しない。したがって、次のような場合、無声子音は有声化している。

figiusu（挽き臼）　momofigi（ももひき）（以下略、迫野著一九九頁）

としてdの例外となるとした場合の用例として、

むなしぐ（6-4）、じづたり（11-2）、くぢづ、がら（14-2）

といったものが拾えるのである。

以上から、追野論文の『レキシコン』に現われた「中濁」現象の諸特徴と、本資料における共通語と異なる濁点を有する語の用例群から帰納された諸特徴とはほぼ一致し、相違点はないと言える。

六　式亭三馬『浮世風呂』前編巻之下に見られる「仙台浄瑠璃」の語り

以上検討したところから、本資料の共通語とは異なる濁点を有する語の用例群には、現代の青森市黒石市方言において、また江戸時代後期の現青森県出身者の方言を記録したと推定される『レキシコン』においては「中濁」現象として認められた、語中尾カ・タ行音有声化現象と同様の現象が反映されていると認められる。

さらに本節では、式亭三馬の『浮世風呂』（一八〇九～一三）前編巻之下に見られる「仙台浄瑠璃」の語りを紹介したい。まず当該部分の前半を引用する。なお、［　］内は割注形式のト書き部分である。

▲［五人づれのざとうのうち二人の盲人風呂の中にてせんだい浄瑠璃をかたる］「さる程に爰に又、九郎判官義経どのが、八島をさして下らるゝ引。扨早、其日の出立には、上には赤地の錦の直衣を引張り、下には紺の布子のどてらを引張けり引。附属ふ御供には亀井片岡伊勢駿河、西塔の武蔵坊、彼等なんどが御供にて、尻から泥水の流れるやうに下らるゝ引。其翌も下らるゝ引。又明後日も下らるゝ引。めつたやたらに下らるゝ。「扨早、御大将も、長旅路の事なれば、草臥果だよナント弁慶、何曾をかけべいが解ぐ気は無かどさ。おぎやり申せば弁慶は、御大将の事だあ物、随分謎を解ますべい。そんなら謎をかけべいか。そも〳〵真桑瓜とかけて何と解と、おぎやり申せば弁慶は、少しばかりは小首をかたぶけ居たりけり引。やう〳〵思按が附たつけと、夫は何より心易し。そも〳〵真桑瓜とかけては、俵藤太秀郷と解まする。其心はあんだんべ。むかでかなはぬと解たりけり。御大将我折果だよ。コリヤ又弁慶は日本一の謎解の名人だと、よろこびいさんで八島の浦へ着にけり。（以下略、神保五彌校注『浮世風呂　戯場粋言幕の外　大千世界楽屋探』（新日本古典文学大系　岩波書店1989、五九～六〇頁、注二）

以上の引用部分だけでも次のような用例が見られる。なお、分類の方針と番号は前掲渡辺論文のものを準用する。例の後の洋数字は二例以上の場合の使用度数を示す。用例の頭が＊になっているものは当該条件の例外となることを表わす。

1　有声化現象

・にしぎ（錦）　・ひだゞれ（直垂）　・しだ（下）　・つぎしだかふ（附属）　・おんども（御供）2　・くわだおか（片岡）　・せへどう（西塔）　・くたびれはでだよ（草臥果てたよ）　・とぐ（解く）　・ねへかどさ（「…無えか」とさ）　・おりはでだよ（折果てたよ）

2　鼻音化現象？

・くんだらるる（下らるる）5　・なんど（など？なんど？）

3　1にならない条件

①語頭（検討省略）

②／N／の後

＊おんども（御供）2

③/Q/の後

・めつたやたらに　・ついたつけと（附たつけ）

④/E（長母音）/の後

＊せへどう（西塔）

⑤狭母音i、uの後で後続母音がa、e、o

＊ひだだれ（直垂）　＊しだ（下）　＊つぎしだかふ（附属）

⑥狭母音i、uの後で後続母音がi、uだと例外にならない。

・にしぎ（錦）　・つぎしだかふ（附属）

渡辺論文の1の語中尾カ・タ行音有声化現象についてはこのわずかな引用部分だけでも多数の用例が見られ、同現象がこの「仙台浄瑠璃」の語りにも見られることはほぼ確実に言えるであろう。2の入り渡り鼻音現象については「くんだらるる」は該当例と言えるが、「なんど」は共通語形としても諸文献に用例があるため疑問となる例であり、確実に入り渡り鼻音現象があったとは言い難い。

ただし、1の例外となる3については、①の語頭は検討するまでもなく認められ、③の促音の後と⑥の狭母音i、uの後で後続母音がi、uの場合についても用例が各二例認められるので、黒石市方言と共通すると言えるのだが、②の撥音の後、④の長母音の後の場合には各一例、⑤の狭母音i、uの後で後続母音がa、e、oの場合には三例の反例が認められる。このうち②の「おんども」は共通語形として諸文献に存在する「おとも」が有声化して「おども」となった後、2の鼻音化現象によって生じた語形の可能性もあり、④の長母音の後は四節で検討したようにそもそも近代以前には存在しなかった例外条件である可能性があるため、それほど問題ではない。

問題なのは⑤の例外三例である。これは黒石市方言の特徴と相違し、かつ迫野論文の『レキシコン』の特徴とも、本資料の特徴とも相違する。

何故か。その原因として二つの可能性がある。一つは方言資料としての『浮世風呂』の性格である。『日本語学研究事典』（明治書院2007）の「浮世風呂」の項の解説（土屋信一氏担当）に拠れば、作者式亭三馬は「自身が『三馬において旅大きらひさ』（『狂言田舎操』下）と言っているように、ほとんど江戸から出ていないために、方言に関しては疎く、田舎者の言葉の類型的表現にとどまっている」という。そのためこの「仙台浄瑠璃」の語り部分についても、三馬が江戸で見聞したものの「模写」であるに留まり、かつ滑稽本としてのある種の誇張表現により、本来は有声化しない場合にまで筆を及ぼしてしまったということが考えられる。

二つめの可能性は、三馬自身の誇張による追加ではなく、当時の「仙台浄瑠璃」の語りにこの通りの有声化が起きていたというものである。母音の無声化現象自体がこの時点、あるいは「仙台浄瑠璃」の語りの原型が完成した時点でそれが当時まで墨守されて語り伝えられていたのかもしれないが、まだ一般化せず、有声化現象の例外もまだ始まっていなかったか、ごく一部に及んでいたに過ぎなかったというものである。

このどちらであるかは現時点では断定できない。今後同時期の成立で比較可能な資料を見つけ出せれば、どちらであるかを断定できるかもしれない。

七　本稿のまとめ

以上、本資料の共通語とは異なる濁点を有する語を冒頭の十五折分だけについてであるが抜き出し、先行研究（渡辺・迫野論文）で指摘された現代黒石市方言と『レキシコン』における語中尾カ・タ行音有声化現象（迫野論文では「中濁」現象）および式亭三馬の『浮世風呂』に見える「仙台浄瑠璃」の語り部分と比較した。その結果、本資料の調査結果と三者の諸特徴とは無声化母音に関わる一点にやや問題が残るものの、ほぼ一致することがわかった。

現時点では、本資料は、その語中尾カ・タ行音有声化現象から見て、江戸時代後期以降の東北方言、具体的には青森県黒石市方言などの北部東北方言に近いのではないかという見通しを得た。今後はさらに本資料に見られる他の言語現象を検討したり、東北の他の地域の方言（例えば宮城県仙台方言など）と比較したりするなどして、この見通しを検証していく必要があるだろう。（以上）

注一　その後、次の翻刻を公刊した。参照されたい。「（その四）」で完結する予定である。

・「仮名書梵網経菩薩戒（仮称）」翻刻（その一）（『都留文科大学国文学論考』第五十六号、2020.3）

・「仮名書梵網経菩薩戒（仮称）」翻刻（その二）（『都留文科大学国文学論考』第五十七号、2021.3）

注二　『浮世風呂』の本文中には「解ぐ気」の「ぐ」、「おぎやり申せば」の「ぎ」などに「しろきにごり」の濁点を使用しているが、印刷の手間を考慮して通常の濁点とした。

参考文献（敬称略）

鎌田茂雄他編『大蔵経全解説大事典』雄山閣1998

迫野虔徳「第四章　方言特徴の成立―『中濁』考―」（『文献方言史研究』清文堂1998所収）

神保五彌校注『浮世風呂 戯場粋言幕の外 大千世界楽屋探』（新日本古典文学大系、岩波書店1989）

日本国語大辞典編集委員会編『日本国語大辞典第二版』（小学館2000～2001）

飛田良文他編『日本語学研究事典』（明治書院2007）

渡辺修平「青森県黒石市方言の音声事象について―共時論の視点から―」（『弘学大語文』10、1984.3）

受領日　二〇二一年四月二四日
受理日　二〇二一年六月　九日

（表一）仮名書梵網経菩薩戒の共通語形と異なる濁音語・語連続（ただし１～15折部分のみ）

No.	用例（文節）	共通語形	漢字表記	濁音行	所在	品詞	備考
1	かだし	かたし	難	ダ	1 - 3	形	
2	こどを	ことを	(事)	ダ	1 - 4	名	
3	ねがわぐわ	ねがわくわ	願	ガ	1 - 5	副	
4	あわせで	あわせて	合	ダ	2 - 2	接助	
5	きぎたまい	ききたまい	聴（給）	ガ	2 - 2	動	
6	とがんと	とかんと	説	ガ	2 - 3	動	
7	あづまり	あつまり	集	ダ	2 - 3	動	
8	きぎたまい	ききたまい	聴（給）	ガ	2 - 4	動	
9	みつがら	みずから	自	ガ	2 - 4	副	濁音の位置一拍後へ
10	なぐんば	なくんば	無	ガ	3 - 1	形	
11	もぐねんせよ	もくねん	黙然	ガ	3 - 1	名	漢語
12	もんねん、するが	もくねん	黙然		3 - 1		もぐねんの例外
13	だいとぐ	だいとく	大徳	ガ	3 - 2	名	漢語
14	あぎらがに	あきらかに	明	ガ 2	3 - 3	形動	２箇所
15	ほとげ	ほとけ	仏	ガ	3 - 3	名	
16	ながに	なかに	中	ガ	3 - 3	名	
17	おいで	おいて	於	ダ	3 - 3	連語（接助）	
18	はらだい、もぐしや	はらだいもくしゃ	波羅提木叉	ガ	3 - 4	名	漢語
19	はらだいもくしや	はらだいもくしゃ	波羅提木叉		3 - 4		はらだいもぐしやの例外
20	いッば	いっぱ	者	バ *	3 - 4	連語（接助）	促音の後の濁音
21	とぎわ	ときわ	時	ガ	3 - 5	名	
22	がこどく	がごとく	如	ダ	3 - 5	助動	濁音の位置一拍後へ
23	がごとぐ	がごとく	如	ガ	4 - 1	助動	
24	こどを	ことを	言	ダ	4 - 1	名	
25	がごとぐ	がごとく	如	ガ	4 - 1	助動	
26	がごとぐ	がごとく	如	ガ	4 - 2	助動	
27	こどを	ことを	(事)	ダ	4 - 2	名	
28	がこどし	がごとし	如	ダ	4 - 3	助動	濁音の位置一拍後へ
29	すなわぢ	すなわち	即	ダ	4 - 3	副	
30	ほどけ	ほとけ	仏	ダ	4 - 4	名	
31	こどなる	ことなる	異	ダ	4 - 4	形動	
32	こど	こと	(事)	ダ	4 - 4	名	
33	おごり、かだし	おごりがたし	起難	ダ	4 - 5	形	濁音の位置一拍後へ
34	ながれ	なかれ	勿	ガ	5 - 1	形	
35	しただり	したたり	滴	ダ	5 - 1	名	
36	よをやぐ	よおやく	漸	ガ	5 - 2	副	
37	みづ	みつ	盈	ダ	5 - 2	動	
38	いのぢ	いのち	命	ダ	5 - 5	名	
39	あげんまで	あけんまで	明	ガ	6 - 1	動	
40	たもぢ（がだし）	たもち（がたし）	保	ダ	6 - 1	動	
41	(たもぢ）がだし	(たもち）がたし	難	ダ	6 - 1	形	
42	しゆどう	しゅとう	衆等	ダ	6 - 1	名	漢語
43	かッかぐ	かっかく	各各	ガ	6 - 1	名	漢語
44	ながれ	なかれ	勿	ガ	6 - 3	形	
45	むなしぐ	むなしく	空	ガ	6 - 4	形	
46	いだづらに	いたづらに	徒	ダ	6 - 4	形動	
47	もをげ	もおけ	設	ガ	6 - 5	動	
48	のぢに	のちに	後代	ダ	6 - 5	名	
49	ながれ	なかれ	莫	ガ	6 - 5	形	
50	しゆとう	しゅとう	衆等		6 - 5	名	しゆどうの例外
51	かくかく	かくかく	各各		6 - 5	名	かッかぐの例外
52	十ッぽう	じっぽう	十方	バ *	7 - 3	名	促音の後の濁音

No.	用例（文節）	共通語形	漢字表記	濁音行	所在	品詞	備考
53	たでまつる	たてまつる	(奉)	ダ	7 - 3	補助動	
54	まだ	また	亦	ダ	7 - 3	副	
55	たでまつる	たてまつる	(奉)	ダ	7 - 4	補助動	
56	とがん	とかん	説	ガ	7 - 4	動	
57	ぼさづ	ぼさつ	菩薩	ダ	7 - 4	名	漢語
58	こどこどぐ	ことごとく	悉	ダ、ガ	7 - 5	副	濁音の位置一拍後？
59	きげ	きけ	聴	ガ	7 - 5	動	
60	ごとし	ごとし	如		7 - 5	助動	ごどしの例外
61	ことし	ごとし	如		8 - 1	助動	ごどしの例外
62	ことことぐ	ことごとく	悉	ガ	8 - 1	副	
63	ことし	ごとし	如		8 - 2	助動	ごどしの例外
64	はなれで	はなれて	離	ダ	8 - 2	接助	
65	すみ、やがに	すみやかに	速	ガ	8 - 3	形動	
66	さいどす	さいとす	最とす	ダ	8 - 3	格助	
67	だいとく	だいとく	大徳		8 - 4	名	だいとぐの例外
68	いぢじ	いちじ	一時	ダ	8 - 5	名	漢語
69	すぎで	すぎて	過	ダ	8 - 5	接助	
70	かげたり	かけたり	少（欠）	ガ	8 - 5	動	
71	いだらん	いたらん	至	ダ	9 - 1	動	
72	こど	こと	(事)	ダ	9 - 1	名	
73	だいとく	だいとく	大徳		9 - 2	名	だいとぐの例外
74	とぐどう	とくどう	得道	ガ	9 - 2	名	漢語
75	いがんと	いかんと	如何	ガ	9 - 3	副	
76	あのぐ、たら	あのくたら	阿耨多羅	ガ	9 - 4	名	漢語
77	江だまいり	えたまえり	得（給）	ダ	9 - 4	補助動	
78	いがに	いかに	何	ガ	9 - 4	副	
79	どき	とき	時	ガ	9 - 5	名	
80	つとめで	つとめて	努力	ダ	9 - 5	接助	
81	いがんぞ	いかんぞ	如何	ガ	9 - 6	副	
82	もどめ	もとめ	求	ダ	9 - 6	動	
83	いづぐんぞ	いづくんぞ	安	ガ	9 - 6	副	
84	まぢ	まち	須	ダ	9 - 6	動	
85	まづべき	まつべき	待可	ダ	9 - 6	動	
86	たのしみ、をが	たのしみをか	楽	ガ	10- 1	係助	
87	まだ	また	亦	ダ	10- 1	副	
88	ごどし	ごとし	如	ダ	10- 2	助動	
89	をさめで	おさめて	摂	ダ	10- 3	接助	
90	正をぐねん	しょうおくねん	正憶念	ガ	10- 3	名	漢語
91	こど	こと	(事)	ダ	10- 4	名	
92	まだ	また	亦	ダ	10- 5	副	
93	よぐ	よく	能	ガ	10- 5	形	
94	ねづのを	ねつのお	熱悩	ダ	11- 1	名	漢語
95	そうよぐす	そうよくす	澡浴	ガ	11- 1	動	漢語サ変
96	じづ	じゅつ	術	ダ	11- 2	名	漢語
97	正ぶぐす	しょうぶくす	消伏	ガ	11- 2	動	漢語サ変
98	けんなぐ	けんあく	険悪	ガ	11- 3	名	漢語、連声
99	とごろ	ところ	所	ガ	11- 4	名	
100	じがい	じかい	持戒	ガ	11- 4	名	漢語
101	たがふらず	たかぶらず	高振	ガ	11- 4	動	濁音一拍前に移動
102	ほう゛づ	ほういつ	放逸	ダ	11- 5	形動	漢語
103	かいど	かいと	戒と	ダ	11- 6	格助	
104	じがい	じかい	持戒	ガ	11- 6	名	漢語
105	ほりげ	ほりいけ	塹	ガ	12- 1	名	

No.	用例（文節）	共通語形	漢字表記	濁音行	所在	品詞	備考
106	さいぶぐす	さいぶくす	催伏	ガ	12-2	動	漢語サ変
107	たがら	たから	宝	ガ	12-3	名	
108	あどを	あとお	与	ダ	12-3	動	
109	じがい	じかい	持戒	ガ	12-4	名	漢語
110	をくたくど	おくたくと	屋宅と	ダ	12-4	格助	
111	よぐ	よく	能	ガ	12-5	形	
112	こどを	ことを	(事)	ダ	12-6	名	
113	こども	ことも	(事)	ダ	12-6	名	
114	ことことぐ	ことごとく	悉	ガ	13-1	副	
115	そう、じゆす	そうしつす	喪失す	ザ *	13-2	動	漢語サ変
116	こど	こと	(事)	ダ	13-3	名	
117	ながれ	なかれ	勿	ガ	13-3	形	
118	あわせで	あわせて	合わせて	ダ	13-3	接助	
119	たでまつり	たてまつり	(奉)	ダ	13-3	補助動	
120	きぐべし	きくべし	聴	ガ	13-4	動	
121	ながにも	なかにも	中	ガ	13-5	名	
122	まだ	また	複	ダ	13-6	副	
123	をがす	おかす	犯	ガ	13-6	動	
124	こど	こと	(事)	ダ	13-6	名	
125	ながれ	なかれ	勿	ガ	13-6	形	
126	あぐどう	あくどう	悪道	ダ	13-6	名	漢語
127	はせで	はせて	馳	ダ	14-1	動	
128	ほ江づに	ほういつに	放逸	ダ	14-1	形動	漢語
129	しがだし	しがたし	(為) 難	ダ	14-1	形	
130	ほとげ	ほとけ	仏	ガ	14-1	名	
131	とぎ	とき	説	ガ	14-1	動	
132	せづなる	せつなる	切	ダ	14-1	形動	漢語
133	まだ	また	亦	ダ	14-2	副	
134	よぎ	よき	利	ガ	14-2	形	
135	ごとし	ごとし	如		14-2	助動	ごどしの例外
136	ほとげ	ほとけ	仏	ガ	14-2	名	
137	くぢづ、がら	くちづから	口	ダ、ガ	14-2	副	
138	よぐ	よく	能	ガ	14-3	形	
139	もづざいせり	もつざいせり	没在	ダ	14-4	動	漢語サ変
140	ほういづならざる	ほういつならざる	放逸	ダ	14-5	形動	漢語
141	まだ	また	亦	ダ	14-5	副	
142	つけだるが	つけたるが	著	ダ	14-6	助動	
143	にぢや	にちや	日夜	ダ	14-6	名	漢語
144	もどむるが	もとむるが	求	ダ	15-1	動	
145	ぶッぼう	ぶっぽう	仏法	バ *	15-1	名	漢語、パ行→バ行
146	ながに	なかに	中	ガ	15-1	名	
147	よぐ	よく	能	ガ	15-1	形	
148	じゆご、にぢに	じゅうごにちに	十五日	ダ	15-2	名	漢語
149	ふさづを	ふさつを	布薩	ダ	15-2	名	漢語
150	よぐ	よく	善	ガ	15-3	形	
151	きくべし	きくべし	聴		15-3	動	きぐの例外
152	なぐんば	なくんば	無者	ガ	15-3	形	
153	もくねんせよ	もくねんせよ	黙然		15-4	動	もぐねんの例外
154	もくねん、する	もくねんする	黙然		15-4	動	もぐねんの例外

注1　「濁音行」の列で * 印を付したものはガ・ダ行でないもの。
注2　「所在」の列の「1-3」は第1折の3行目を表わす。以下同様。
注3　「備考」の列には当該語（語連続）について注意すべき点を記した。本文中で言及したものも、今後のための覚書もある。